

## A-3

### ブルシャスキー語スリナガル方言で再構成されだした名詞クラス\*

吉岡 乾（国立民族学博物館）

#### 1. はじめに

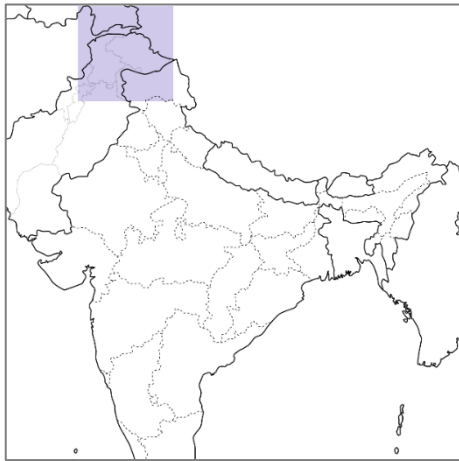
本発表は、インドのジャンムー・カシミール州スリナガル市ボタ・ラーズ居住区で話されているブルシャスキー語において、若年層が老年層と異なった名詞クラスを保有している事実と、その実態について、フィールド調査から明らかになったことを報告するものである。

#### 2. ブルシャスキー語の方言と歴史

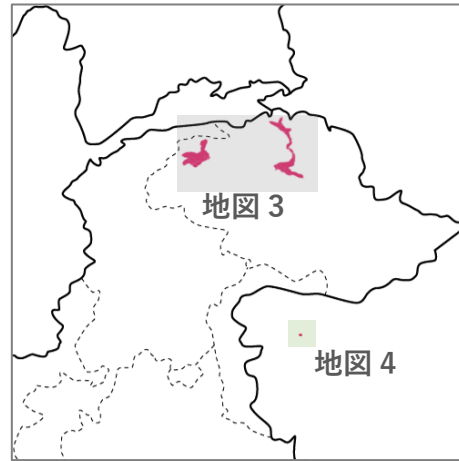
ブルシャスキー語は南アジアの系統的孤立語で、話者 10 万人ほどの膠着的性質の強い言語である。

その使用地域はパキスタン北部が中心で、大きく分けると 3 つの飛び地になっている（地図 1、2）。

その内訳は、パキスタン側に 2 箇所と、インド側に 1 箇所とである。

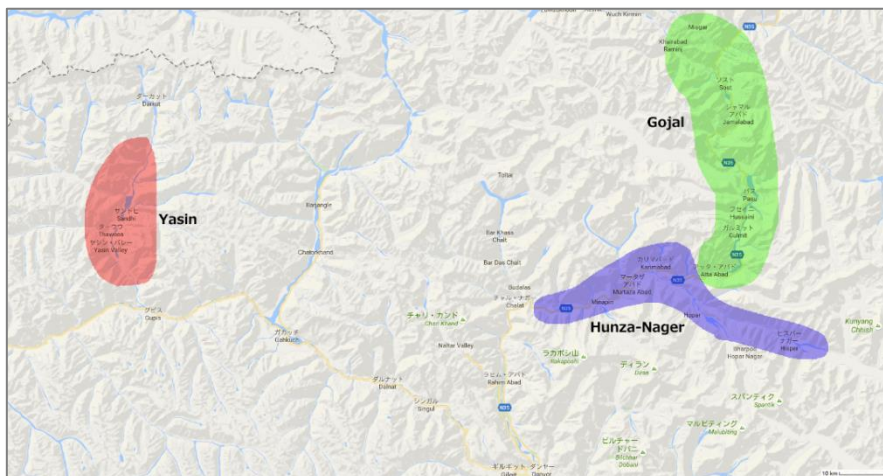


地図 1. 南アジアの中での位置



地図 2. ブルシャスキー語の分布図

地図 2 の示す分布のうち、パキスタン側の両地点を拡大したのが下の地図 3、最短で 200km 強は南の、インド側の一地点を拡大したのが次ページの地図 4 である。



地図 3. パキスタン北部のブルシャスキー語が話されている谷々（地図 2 中央上）

\* 本発表は科学研究費補助金 JK15H05380（代表：吉岡乾）からの支援を受けている。

地図3に示す通り、パキスタン国内のブルシャスキー語使用地域は、いずれもギルギット・バルティスタン州に属しており、西にヤスイン谷（並びに、東隣のイシュコマン谷）、東にフンザ谷、ナゲル谷、ゴジャール（上フンザ）谷となっている。このうち、ヤスイン谷はコワール語と2言語併存、ゴジャール谷はワヒー語と2言語併存となっている。

地図4が示しているのは、インド国内のブルシャスキー語コミュニティの地点である。場所はジャンムー・カシミール州の夏の州都スリナガル市の、ほぼ中央に位置するハリ・パルバット城の東の麓にある、こじんまりとしたボタ・ラージという地区である。



地図4. スリナガル市（選択範囲）の中のボタ・ラージ居住区の位置（地図2右下）

スリナガルのブルシャスキー語コミュニティは、約150年前にナゲル谷などから移住した人々（ナゲル王家の末子を含む）の末裔からなっており、2017年現在で約400~500人が暮らしている。パキスタン側のコミュニティとの交流は分離独立（1947年8月）までは間々あったようである。最若年層はブルシャスキー語をあまり話さないが、若年層以上は話す。同コミュニティ内にはフンザ谷出身の家族や、スカルドゥ（パキスタンのギルギット・バルティスタン州南東）出身のバルティ人家族も含まれており、ブルシャスキー語の飛び地であると共に、バルティ語の飛び地でもある。周辺の言語は、カシミーリー語やウルドゥー語。

そういった経緯で生じた飛び地コミュニティであるため、方言としてはナゲル方言に最も近く、フンザ方言も幾らか混じったようなものとなっている。そのため、地理的な隔たりとは若干異なり、ブルシャスキー語の大まかな方言分類は、次の図1のように示せる。

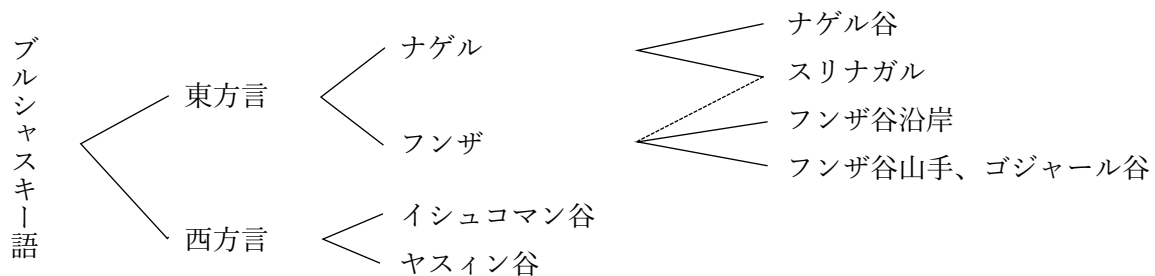


図1. ブルシャスキー語の方言分類

以下、本発表ではボタ・ラーズ居住区で話されているスリナガル方言と、フンザ・ナゲル方言（主としてナゲル方言）を対照して行く。なお、「ブルシャスキー語元来の」といった表現が指すのは、特段の註釈がない限り「スリナガル方言の若者言葉以外で共通の」というニュアンスであることとする。

### 3. ブルシャスキー語における名詞クラス

ブルシャスキー語には、動詞における一致や、動詞語根の選択、形容詞・指示詞における一致、複数接尾辞の選択などを左右する要素として、名詞クラス概念がある。形態統語的な振る舞いとしては周辺の印欧語における文法性（gender）にも似ているが、指示対象の物理的特性に依存して範疇分けがされているという点では、必ずしも同じとは言えない。大きく分けると、ブルシャスキー語元来の名詞クラスは次の4つである：ヒト男性（HM類）、ヒト女性（HF類）、具象物（X類）、抽象物（Y類）<sup>1</sup>。

表 1. ブルシャスキー語元来の名詞クラスと指示対象の例

ヒト男性	HM	男、少年、父、祖父、息子、兄弟、おじ、甥、神
ヒト女性	HF	女、少女、母、祖母、娘、姉妹、おば、姪、魔女、妖精
具象物	X	動物、果物、天体、三つ編み、乗り物、鬼
抽象物	Y	樹木、草花、葡萄の実、気象、建物、髪、液体、材質、時空間、概念

実際に一致・選択がどう異なるかを示すナゲル方言からの例を以下の(1)に挙げる。ここでは、近称指示詞、複数接尾辞<sup>2</sup>、コピュラの異なりに注目して頂きたい。(1)の例文は全て、「この/これらの、X(SG/PL)、コピュラ」という語順になっている。

- (1) a. HM類 *k<sup>h</sup>iné hir báí* 「この男だ」 — *k<sup>h</sup>ué hiríkants báán* 「これらの男たちだ」  
 b. HF類 *k<sup>h</sup>iné gus bo* 「この女だ」 — *k<sup>h</sup>ué gusíants báán* 「これらの女たちだ」  
 c. X類 *k<sup>h</sup>osé huk bi* 「この犬だ」 — *k<sup>h</sup>otsé hukái bió* 「これらの犬どもだ」  
 d. Y類 *k<sup>h</sup>oté ʔom dílá* 「この木だ」 — *k<sup>h</sup>oké ʔomíteay bitsán* 「これらの木々だ」

### 4. 名詞クラス体系の崩壊（一般論）

名詞クラス（類別クラス、文法性）の崩壊について、幾つもの事例を引きつつ Sands (1995: 255) は次のように総括している：

名詞クラスの体系は動的であり、衰えたり失われたりする可能性を秘めている。その展開は言語の消滅によるものだけではなく、元気な言語においてすら生じうる。

具体例を見てみると、例えば Schmidt (1985) は、消滅に向かうジルバル語の若者言葉において、複数のクラスが区別されなくなって同一化し、結果としてクラスの数が増減した事例を述べている。Demuth, Faraclas, & Marchese (1986) が示したのは、より単純な名詞クラス体系の言語との接触など

<sup>1</sup> 厳密な話をするならば、時空間（Z類）という下位クラスを Y類の中に認めるべきであるが、本発表の論旨とは関わって来ないためここでは捨象し、クラス数は4つと数える。

<sup>2</sup> ブルシャスキー語の複数接尾辞は語彙的にやや緩やかに決まっている数十種類の異形態があり、ここで示している具体例は一部に過ぎない。その異形態は形式的にグループ分け可能で、それらグループと名詞クラスとの相関関係は、複数接尾辞を見ればクラスが判別できる程度に大きい。

によって、体系自体が（部分的に）失われた、ニジェール・コンゴ語族のクル語群やクロス・リバー諸語の例である。このように、先行研究が示している「名詞クラス体系の崩壊（the decay of noun classification systems；Sands 1995）」現象の方向性としては、単純化による一方的な減少・消滅であるというのが一般的であろう。

## 5. ブルシャスキー語スリナガル方言における一致体系

3節で示したブルシャスキー語元来の4つの名詞クラスは、スリナガル方言でも老年層の発話では変わらず確認されている<sup>3</sup>。一方で、若年層話者はそうではない名詞クラス体系を共通して示していた<sup>4</sup>。本節ではその詳細を、具体例と共に示す。

### 5.1. コピュラ・動詞の一致

先の(1)にあるように、ブルシャスキー語の3人称のコピュラは名詞クラスと数によって異なる7形式がある。これらは、スリナガル方言でも年代に関係なく共通して、パキスタンのナゲル谷の方言と同一の語形を用いている。けれども、スリナガルの若年層は(1d)に関して、異なったコピュラの用法を示す。(2)は、スリナガル若年層のコピュラの例であるが、名詞クラスの類名はコピュラや指示詞から判定し、元来の名称に合わせた呼び名である。

(2) a.	HM類	<i>kʰiné hir báí</i>	「この男だ」	—	<i>kʰué hiríkants báán</i>	「これらの男たちだ」
b.	HF類	<i>kʰiné gus bo</i>	「この女だ」	—	<i>kʰué guéíants báán</i>	「これらの女たちだ」
c.	X類	<i>kʰosé huk bi</i>	「この犬だ」	—	<i>kʰotsé hukáí bió</i>	「これらの犬どもだ」
d.	???	<i>kʰosé ʈom bi</i>	「この木だ」	—	<i>kʰoké ʈomítəŋ bitsán</i>	「これらの木々だ」
e.	Y類	<i>kʰoté sambá dílá</i>	「この考えだ」	—	<i>kʰoké sambámiŋ bitsán</i>	「これらの考えだ」

ここで問題になるグループは、(2d)の「???'である。これは、単数形がX類、複数形がY類と同じコピュラ・指示詞で表現されている。<sup>5</sup>

それとは別に、老年層もパキスタン方言と異なる動詞一致を見せる場面があった。それは、次の(3)に

<sup>3</sup> 本発表は全て、発表者によるフィールド調査のデータに基づいている。スリナガル方言の調査は2016年9月と2017年7月の2回（於ボタ・ラージ）。老年層話者の代表はRaja Mahboob Ali Khan氏（1936年生まれ）、若年層話者の代表はRaja Wajid Ali氏（1988年生まれ）、Raja Raza氏（1978年生まれ）である。

<sup>4</sup> ブルシャスキー語スリナガル方言唯一の先行研究であるMunshi（2006）では、パキスタン諸方言の先行研究を引きつつ、元来の名詞クラスと同じものを提示している。一部名詞については「例外的に」X類かY類かで揺れるものがあり、個人差も影響しているかも知れない（*ibid.* 161–167）などと述べるが、それらについても挙げている例はやはり、元来のクラスに一致しているものである。

<sup>5</sup> 元来のブルシャスキー語にも、単数形がX類、複数形がY類として振る舞う名詞が、僅かばかりだが存在する：例 @-úʈis「足（SG.X）」— @-úʈiŋ「」（PL.Y）」<sup>†</sup>；*dzanphálo*「カーペット織り用の櫛（SG.X）」— *dzanpháliŋ*「」（PL.Y）」。但しこれらは極めて例外的（収集語彙中0.1%未満）であるし、意味的に何等かの範疇を成しているとも見做し難いため、ここで扱っているスリナガル方言若年層のものとは質的に別物であると考えて差し支えない。なお、「足」に関しては、既にスリナガル方言でも同じ振る舞いを確認した。【<sup>†</sup> @- は、所有者に一致する人称接頭辞が入るスロットを表している。註6も参照のこと】

あるような、助動コピュラを用いた動詞の複合時制における Y 類主語一致である。

- (3) 「ペルシア語だ」 「私はペルシア語ができない (私にはペ語が来ない)」
- |           |    |                     |    |                                   |
|-----------|----|---------------------|----|-----------------------------------|
| Hunza.    | a. | <i>faarsí bilá</i>  | b. | <i>dzáar faarsí atšútsilá</i>     |
| Nager.    | a. | <i>faarsí d̥ilá</i> | b. | <i>dzáare faarsí aúdzútsibilá</i> |
| Srinagar. | a. | <i>faarsí d̥ilá</i> | b. | <i>dzáare faarsí aúdzútsibí</i>   |

Y 類 (Y 類) コピュラ単独形はフンザでは *bilá*、ナゲル・スリナガルでは *d̥ilá* なのだが、複合時制を作るために動詞と複合して用いられる場合には、フンザ・ナゲルのどちらでも *bilá* となる (フンザでは更に、条件によって頭の *b* が落ちる)。一方で、スリナガルでは、*d̥ilá* が *bilá* でもなく *bí* (X 類と同形) となっているのが年代に関わらず特徴的である。

## 5.2. 動詞語幹の補充

ブルシャスキー語の一部の動詞は、目的語の名詞クラス・数に対応して、語根を補充法で交替させるものがある。その最たるものが「与える」であり、3つの語根を持っている：東方言 HM/HF/X @-ú<sup>6</sup>、Y.SG @-tshí-、Y.PL @-yún- (スリナガル方言 @-yón-)。

この動詞群も、老年層は区別ができていたのだが、若年層は使い分けを曖昧にしていた。「私にくれ」 (= (4)) の場合は比較的安定して選択されていたが、それ以外の、「私がお前にやろう」 (= (5)) などの場合には、いずれの語根でも良いという判断を受けた。このような混同はパキスタン諸方言では見られない。単数形の例のみ示す。

- (4) a. *tshil d̥a-tshí/\*dzo-ó* 「私に水 (Y 類) をくれ」 (*dzo-ó* < *dza-ú*; *dza-*・*d̥a-* は 1 人称単数接頭辞)  
 b. *mobáil dzo-ó/\*d̥a-tshí* 「私に携帯電話 (X 類) をくれ」
- (5) a. *tshil gu-tshí-team/gu-ú-team* 「私はお前に水をやろう」 (*gu-* は 2 人称単数接頭辞)  
 b. *mobáil gu-tshí-team/gu-ú-team* 「私はお前に携帯電話をやろう」

## 5.3. 複数形

このように、若年層が老年層とは異なる言葉遣いをしている一方で、複数接尾辞の選択などに関しては、語形が分からなくなってしまっている場合を除いて、共通して目立った年代差を示すことはなかった。つまり、元来 X 類だった名詞の接尾辞は X 類らしく、Y 類だった名詞の接尾辞は Y 類らしいまま、保たれているのである。(2d) の *tom* 「木」の複数形が、例えば X 類的な *\*tomíants* 「木々」となったりは、決してしていない。

## 6. ブルシャスキー語スリナガル方言で再構成され出した名詞クラス

以上見て来たことから、スリナガル方言では、動詞の一致 (= (3)) などにおいて老年層でも多少の通時的変化を蒙ってはいるものの、その年代と若年層との間で大きな隔たりが生じていることが分かる。そしてその若年層で見せている変化とは、例えば「与える」の語根選択の自由化 (= (5)) などから言えることとして、元来の名詞クラス体系 (特に、非ヒトクラス) の崩壊であると見る事ができる。

<sup>6</sup> @- は、被動者 (undergoer) に一致する人称接頭辞が入るスロットを表している

片や、指示詞やコピュラで、例えば動物と概念とは明確に区別を保っている (= (2c, e)) のも確かだが、しかしそこでも、どっちつかずのクラスが新規に発生しており (= (2d))、しかもそのクラスに入る名詞が最も多いのが実情である。その、指示詞・コピュラから見出せる、新しいクラス分けが以下の表 2 である。

表 2. ブルシャスキー語スリナガル方言若年層の名詞クラスと指示対象の例

ヒト男性	HM	男、少年、父、祖父、息子、兄弟、おじ、甥、神	HM
ヒト女性	HF	女、少女、母、祖母、娘、姉妹、おば、姪、魔女、妖精	HF
動物	A	動物、鬼	X
具象物	X	果物、天体、乗り物；樹木、草花、葡萄の実、建物、髪	X; Y
抽象物	Y	気象、液体、材質、時空間、概念	Y

ヒトクラスは不変であるが、元来 X 類・Y 類と分けられていた名詞が、3 分割されるようになっている。ここでは仮に、新しい名詞クラスを A 類 (Animal) とした。表 2 の「具象物 (X 類)」と「抽象物 (Y 類)」とは、元来 (表 1) のそれとは指している範囲が異なっているのも注意が必要である。新 X 類の欄の、セミコロンの左が元来 X 類だったもの、右が Y 類だったものである。

ブルシャスキー語の元来の名詞クラス 4 分類は、ヒト性は関与していたが、有生性は無視されていた。具象か抽象かの線引きも、主観的に大まかに言えば「数え易いか否か、或いは数えたいか否か」といった基準であった。一方で、スリナガル方言若年層の名詞クラス 5 分類は、有生性によって A 類が新設されており、具象か抽象かの分別は、「決まった形がある (= スリナガル方言 *tʰóos*) か否か」といったものへと再構成されている。それは、より語彙的なクラス分類であった元来の体系から、より客観的な範疇化による体系と変化したのだと言っても良いのではないか。

但し一方で、元来のクラス体系で有効であった接尾辞からクラスを見抜く手法は、複数接尾辞が旧態依然である (= 5.3 節) ため、使えなくなった (cf. 註 2)。

## 7. おわりに

本発表では、ブルシャスキー語スリナガル方言の若者言葉において、名詞クラス体系が崩壊し掛け、引き止められた結果、クラスの数が増え、分類が比較的客観化されたとも言えるであろう現象について、報告した。これは、名詞クラス体系の崩壊が必ずしも一方的に衰退へと向かわず、盛り返す可能性もあることを示す一事例でもあるし、類型論的な名詞クラスの基盤となる認知的範疇化のサンプルとしても有意義なものかと思う。

## 引用文献

- Demuth, Katherine, Nicholas Faraclas, and Lynell Marchese. 1986. Niger-Congo noun class and agreement systems in language acquisition and historical change. In Colette Craig (ed.), *Noun classes and categorization (TSL 7)*, 453–471. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Munshi, Sadaf. 2006. Jammu and Kashmir Burushaski: Language, language contact, and change. Unpublished doctoral dissertation, The University of Texas at Austin.
- Sands, Kristina. 1995. Nominal Classification in Australia. *Anthropological Linguistics*, 37, 247–346.
- Schmidt, Annette. 1985. *Young people's Dyrbal: An example of language death from Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.